

# pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> について

Ken Nakano & Japanese T<sub>E</sub>X Development Community

作成日：2016/05/21

注意：

これは、株式会社アスキー（現アスキー・メディアワークス<sup>1</sup>）が配布している pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> の付属文書ではありません。アスキーのオリジナル版から fork したコミュニティ版 pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> の付属文書です。

2010 年以降、アスキー pT<sub>E</sub>X は、国際的に広く使われている T<sub>E</sub>X Live というディストリビューションに取り込まれ、そこで独自の改良や仕様変更が加えられてきました。最近の T<sub>E</sub>X Live や W32T<sub>E</sub>X では、pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X も元々の pT<sub>E</sub>X ではなく、その拡張版 ε-pT<sub>E</sub>X をエンジンとして用いるようになっています。また、pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のベースである L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X も更新が進められています。

こうした流れにあわせた新しい pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X として、アスキー版から fork して日本語 T<sub>E</sub>X 開発コミュニティ (Japanese T<sub>E</sub>X Development Community) が配布しているものが、コミュニティ版 pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X です。開発中の版は GitHub のリポジトリ<sup>2</sup> で管理しています。コミュニティ版 pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X はアスキー版とは異なりますので、バグレポートはアスキー宛てではなく、日本語 T<sub>E</sub>X 開発コミュニティに報告してください。T<sub>E</sub>X Forum や GitHub の Issue システムが利用できます。

この文書 (platex.pdf) はコミュニティ版 pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X の概要を説明したもので、実際の pL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のソースコードは pldoc.pdf で説明しています。

---

<sup>1</sup>アスキー日本語 T<sub>E</sub>X (pT<sub>E</sub>X)、<http://ascii.asciimw.jp/pb/ptex/>

<sup>2</sup><https://github.com/texjporg/platex>

## 1 概要

この文書は、 $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$  の概要を示していますが、使い方のガイドではありません。 $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$  の機能についての説明は、[7] を参照してください。日本語  $\text{T}\text{E}\text{X}$  については [6] を参照してください。

$\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$  では [2] で説明されている、いくつかの拡張コマンドの動作を修正しています。その詳細については、`plext.dtx` を参照してください。

$\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$  の機能については、[4] や [3] などを参照してください。新しい機能については `usrguide.tex` を参照してください。

この文書の構成は次のようになっています。

**第 1 節** この節です。この文書についての概要を述べています。

**第 2 節**  $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$  で拡張した機能についての概要です。付属のクラスファイルやパッケージファイルについても簡単に説明しています。

**第 3 節** 旧バージョンの  $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X}$  との互換性について述べています。

**付録 A** この文書ソースの `DOCSTRIP` のためのオプションについて述べています。

**付録 B**  $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$  の `dtx` ファイルをまとめて一つの `DVI` ファイルにするための文書ファイルの説明をしています。

**付録 C** 付録 B で説明をした文書ファイルを処理する `sh` スクリプト (手順)、`DOCSTRIP` 文書ファイル内の入れ子の対応を調べる `perl` スクリプトなどについて説明しています。

## 2 $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$ の機能について

$\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$  の機能は、いくつかのファイルに分割されて実装されています。これらのファイルはつぎの 3 種類に分類することができます。

- フォーマットファイル
- クラスファイル
- パッケージファイル

フォーマットファイルには、基本的な機能が定義されており、 $\text{p}\text{L}\text{A}\text{T}\text{E}\text{X } 2_{\epsilon}$  の核となるファイルです。このファイルに定義されているマクロは、実行時の速度を高めるために、あらかじめ  $\text{T}\text{E}\text{X}$  の内部形式の形で保存されています。

クラスファイルは文書のレイアウトを設定するファイル、パッケージファイルはマクロの拡張を定義するファイルです。前者は`\documentclass` コマンドを用いて読み込み、後者は`\usepackage` コマンドを用いて読み込みます。

古い *p*LaTeX 2.09 ユーザへの注意：

クラスファイルとパッケージファイルは、従来、スタイルファイルと呼ばれていたものです。LaTeX 2<sub>ε</sub> ではそれらを、レイアウトに関するものをクラスファイルと呼び、マクロの拡張をするものをパッケージファイルと呼んで区別するようになりました。

TeX 文書が使用するクラスは、文書のプリアンブルで`\documentclass` コマンドを用いて指定します。`\documentclass` ではなく、旧版の`\documentstyle` を用いると、自動的に 2.09 互換モードに入ります。互換モードは旧版の文書を組版するためだけに作られていますので、新しく文書を作成する場合は、`\documentclass` コマンドを用いてください。互換モードでは LaTeX の新機能も使えなくなります。

旧版では、`\documentstyle` のオプションでマクロファイルを読み込んでいましたが、LaTeX では、`\usepackage` コマンドを用いて読み込みます。

## 2.1 フォーマットファイル

フォーマットファイルには、基本的な機能が定義されていますが、これらは TeX の内部形式に変換された形式となっています。フォーマットファイルを作成するには、ソースファイル “`platex.ltx`” を `inipTEX` プログラムで処理します。ただし、TeX Live や W32TeX ではこの処理を簡単にする `fmtutil` あるいは `fmtutil-sys` というプログラムが用意されています。以下を実行すれば、フォーマットファイル `platex.fmt` が作成されます。

```
fmtutil --byfmt platex
```

次のリストが、“`platex.ltx`” の内容です。ただし、このバージョンでは、LaTeX から pLaTeX 2<sub>ε</sub> への拡張を `plcore.ltx` をロードすることで行ない、`latex.ltx` には直接、手を加えないようにしています。したがって `platex.ltx` はとても短いものとなっています。`latex.ltx` には LaTeX のコマンドが、`plcore.ltx` には pLaTeX 2<sub>ε</sub> で拡張したコマンドが定義されています。

```
1 <(*plcore)
2 \let\orgdump\dump
3 \let\dump\relax
4 \input latex.ltx
5 \edef\platexBANNER{\the\everyjob}% save LaTeX banner
6 \typeout{*****^J%
7          *^J%
```

```

8      * making pLaTeX format^^J%
9      *^^J%
10     *****}
11 \makeatletter
12 \input plcore.ltx
13 \the\everyjob
14 \let\dump\orgdump
15 \let\orgdump\@undefined
16 \makeatother
17 \dump
18 <plcore>\endinput
19 </plcore>

```

実際に pLaTeX 2<sub>ε</sub> への拡張を行なっている `plcore.ltx` は、DOCSTRIP プログラムによって、次のファイルの断片が連結されたものです。

- `plvers.dtx` は、pLaTeX 2<sub>ε</sub> のフォーマットバージョンを定義しています。
- `plfonts.dtx` は、NFSS2 を拡張しています。
- `plcore.dtx` は、上記以外のコマンドでフォーマットファイルに格納されるコマンドを定義しています。

プリロードフォントや組版パラメータなどの設定は、`pldefs.ltx` をロードすることで行なっています。このファイルに記述されている設定を変更すれば、pLaTeX 2<sub>ε</sub> をカスタマイズすることができます。カスタマイズする場合は、このファイルを直接、修正するのではなく、`pldefs.cfg` という名前でコピーをして、そのファイルを編集します。`pldefs.cfg` は `pldefs.ltx` の代わりに読み込まれます。

### 2.1.1 バージョン

pLaTeX 2<sub>ε</sub> のバージョンやフォーマットファイル名は、`plvers.dtx` で定義しています。

### 2.1.2 NFSS2 コマンド

LaTeX では、フォント選択機構として NFSS2 を用いています。pLaTeX 2<sub>ε</sub> では、オリジナルの NFSS2 と同様のインターフェイスで、和文フォントを選択できるように、`plfonts.dtx` で NFSS2 を拡張しています。

pLaTeX 2<sub>ε</sub> の NFSS2 は、フォントを切替えるコマンドを指定するときに、それが欧文書体か和文書体のいずれかを対象とするものかを、できるだけ意識しないようにする方向で拡張しています。いいかえれば、コマンドが（可能な限りの）判断をします。したがって数多くある英語版のクラスファイルやパッケージファイルなどで書体の変更を行っている箇所を修正する必要はあまりありません。

`plfonts.dtx` ファイルでは、NFSS2 コマンドの定義のほか、プリロードフォントの設定、和文エンコードの定義、組版パラメータなどの設定、フォント定義ファイルなどの記述も含まれています。

NFSS2 についての詳細は、 $\text{\LaTeX}$  2<sub>ε</sub> に付属の `fntguide.tex` を参照してください。

### 2.1.3 出カルーチンとフロート

`plcore.dtx` は、次の項目に関するコマンドを日本語処理用に修正や拡張をしています。

- プリアンブルコマンド
- 改ページ
- 改行
- オブジェクトの出力順序
- トンボ
- 脚注マクロ
- 相互参照
- 疑似タイプ入力

## 2.2 クラスファイルとパッケージファイル

$\text{\LaTeX}$  2<sub>ε</sub> が提供をする、クラスファイルやパッケージファイルのいくつかは、オリジナルのファイルを修正しています。

$\text{\LaTeX}$  2<sub>ε</sub> に付属のクラスファイルは、次のとおりです。

- `jbook.cls`, `jarticle.cls`, `jreport.cls`  
横組用の標準クラスファイル。`jclasses.dtx` から作成される。
- `tbook.cls`, `tarticle.cls`, `treport.cls`  
縦組用の標準クラスファイル。`jclasses.dtx` から作成される。
- `jltxdoc.cls`  
日本語の `.dtx` ファイルを組版するためのクラスファイル。`jltxdoc.dtx` から作成される。

また、 $\text{\LaTeX}$  2<sub>ε</sub> に付属のパッケージファイルは、次のとおりです。

- plect.sty

縦組用の拡張コマンドなどが定義されているファイル。

- oldpfont.sty

p $\text{\LaTeX}$  2.09 のフォントコマンドを提供するパッケージ。pl209.dtx から作成される。

- ptrace.sty

$\text{\LaTeX}$  でフォント選択コマンドのトレースに使う `tracefnt.sty` が再定義してしまう NFSS2 コマンドを、p $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  用に再々定義するためのパッケージ。plfonts.dtx から作成される。

- pfltrace.sty

$\text{\LaTeX}$  でフロート関連コマンドのトレースに使う `fltrace.sty`<sup>3</sup> が再定義してしまうコマンドを、p $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  用に再々定義するためのパッケージ。plcore.dtx から作成される。

- ascmac.sty, tascmac.sty

$\text{\LaTeX}$  の標準機能の範囲で、図や罫線で囲んだボックスを出力する命令などを提供するパッケージ。旧バージョンの p $\text{\LaTeX}$  でも配布されていた。

- nidanfloat.sty

二段組時に段抜きのフロートをページ下部にも配置可能にするパッケージ。

### 3 旧バージョンとの互換性

ここでは、このバージョンと以前のバージョンとの互換性や拡張部分について説明をしています。

#### 3.1 p $\text{\LaTeX}$ 2.09 との互換性

p $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  は、 $\text{\LaTeX}$  の上位互換という形を取っていますが、いくつかのパラメータなども変更しています。したがって英文書など、 $\text{\LaTeX}$  でも処理できるファイルを p $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  で処理しても、完全に同じ結果になるとは限りません。これは、英語版の  $\text{\LaTeX}$  でも同じです。詳細は、 $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  に付属の `usrguide.tex` を参照してください。

---

<sup>3</sup> $\text{\LaTeX}$  2014/05/01 で追加されました。参考： $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  News Issue 21 (ltnews21.tex)

多くのクラスファイルやパッケージファイルはそのまま使えると思います。ただし、それらが p $\text{\LaTeX}$  2 $\epsilon$  で拡張しているコマンドと同じ名前のコマンドを再定義している場合は、コマンドの拡張の仕方によってはエラーになることもあります。用いている、クラスファイルやパッケージファイルがうまく動くかどうかを、完全に確かめる方法は残念ながらありません。一番簡単なのは、動かしてみることです。不幸にもうまく動かない場合は、ログファイルや付属の文書ファイルを参考に原因を調べてください。

### 3.2 latexrelease パッケージへの対応

$\text{\LaTeX}$  <2015/01/01>で導入された latexrelease パッケージをもとに、新しい p $\text{\LaTeX}$  では platexrelease パッケージを用意しました。platexrelease パッケージを用いると、過去の p $\text{\LaTeX}$  をエミュレートしたり、フォーマットを作り直すことなく新しい p $\text{\LaTeX}$  を試したりすることができます。詳細は platexrelease のドキュメントを参照してください。

## A DOCSTRIP プログラムのためのオプション

この文書のソース (platex.dtx) を DOCSTRIP プログラムによって処理することによって、いくつかの異なるファイルを生成することができます。DOCSTRIP プログラムの詳細は、docstrip.dtx を参照してください。

この文書の DOCSTRIP プログラムのためのオプションは、次のとおりです。

オプション	意味
plcore	フォーマットファイルを作るためのファイルを生成
pldoc	p $\text{\LaTeX}$ 2 $\epsilon$ のソースファイルをまとめて組版するための文書ファイルを生成
shprog	上記のファイルを作成するための sh スクリプトを生成
plprog	入れ子構造を調べる簡単な perl スクリプトを生成
Xins	上記の sh スクリプトや perl スクリプトを取り出すための DOCSTRIP バッチファイルを生成

### A.1 ファイルの取り出し方

たとえば、この文書の “plcore” の部分を “platex.ltx” というファイルにするときの手順はつぎのようになります。

1. platex docstrip

2. 入力ファイルの拡張子 (dtx) を入力する。
3. 出力ファイルの拡張子 (ltx) を入力する。
4. DOCSTRIP オプション (plcore) を入力する。
5. 入力ファイル名 (platex) を入力する。
6. platex.ltx が存在する場合は、確認を求めてくるので、“y” を入力する。
7. 別の処理を行なうかを問われるので、“n” を入力する。

これで、platex.ltx が作られます。

あるいは、次のような内容のファイル fmt.ins を作成し、platex fmt.ins することでも platex.ltx を作ることができます。

```
\def\batchfile{fmt.ins}
\input docstrip.tex
\generateFile{platex.ltx}{t}{\from{platex.dtx}{plcore}}
```

## B 文書ファイル

ここでは、このパッケージに含まれている dtx ファイルをまとめて組版するための文書ファイルについて説明をしています。個別に処理した場合と異なり、変更履歴や索引も付きます。全体で、およそ 150 ページ程度になります。

filecontents 環境は、引数に指定されたファイルが存在するときは何もませんが、存在しないときは、環境内の内容でファイルを作成します。pldoc.dic ファイルは、mendex プログラムで索引を処理するときに \西暦、\和暦に対する「読み」を付けるために必要です。

```
20 \*pldoc
21 \begin{filecontents}{pldoc.dic}
22 西暦      せいれき
23 和暦      われき
24 \end{filecontents}
```

文書クラスには、jltxdoc クラスを用います。plext.dtx の中でサンプルを組み立てていますので、plext パッケージが必要です。

```
25 \documentclass{jltxdoc}
26 \usepackage{plext}
27 \listfiles
28
```



いくつかの TeX プリミティブとコマンドを索引に出力しないようにします。

```
29 \DoNotIndex{\def,\long,\edef,\xdef,\gdef,\let,\global}
30 \DoNotIndex{\if,\ifnum,\ifdim,\ifcat,\ifmmode,\ifvmode,\ifhmode,%
31           \iftrue,\iffalse,\ifvoid,\ifx,\ifeof,\ifcase,\else,\or,\fi}
32 \DoNotIndex{\box,\copy,\setbox,\unvbox,\unhbox,\hbox,%
33           \vbox,\vtop,\vcenter}
34 \DoNotIndex{\@empty,\immediate,\write}
35 \DoNotIndex{\egroup,\bgroup,\expandafter,\begingroup,\endgroup}
36 \DoNotIndex{\divide,\advance,\multiply,\count,\dimen}
37 \DoNotIndex{\relax,\space,\string}
38 \DoNotIndex{\csname,\endcsname,\@spaces,\openin,\openout,%
39           \closein,\closeout}
40 \DoNotIndex{\catcode,\endinput}
41 \DoNotIndex{\jobname,\message,\read,\the,\m@ne,\noexpand}
42 \DoNotIndex{\hsize,\vsize,\hskip,\vskip,\kern,\hfil,\hfill,\hss,\vss,\unskip}
43 \DoNotIndex{\m@ne,\z@,\z@skip,\@ne,\tw@,\p@,\@minus,\@plus}
44 \DoNotIndex{\dp,\wd,\ht,\setlength,\addtolength}
45 \DoNotIndex{\newcommand,\renewcommand}
46
```

索引と変更履歴の見出しに \part を用いるように設定をします。

```
47 \IndexPrologue{\part*{索引}}%
48           \markboth{索引}{索引}%
49           \addcontentsline{toc}{part}{索引}%
50 イタリアック体の数字は、その項目が説明されているページを示しています。
51 下線の引かれた数字は、定義されているページを示しています。
52 その他の数字は、その項目が使われているページを示しています。}
53 %
54 \GlossaryPrologue{\part*{変更履歴}}%
55           \markboth{変更履歴}{変更履歴}%
56           \addcontentsline{toc}{part}{変更履歴}}
57
```

標準の \changes コマンドを、複数ファイルの文書に合うように修正しています。

```
58 \makeatletter
59 \def\changes@#1#2#3{%
60   \let\protect\@unexpandable@protect
61   \edef\@tempa{\noexpand\glossary{#2\space\currentfile\space#1\levelchar
62           \ifx\saved@macroname\@empty
63             \space\actualchar\generalname
64           \else
65             \expandafter\@gobble
66             \saved@macroname\actualchar
67             \string\verb\quotechar*%
68             \verbatimchar\saved@macroname
69             \verbatimchar
70           \fi
71           :\levelchar #3}}%
72   \@tempa\endgroup\@esphack}
73 \makeatother
```

```

74 \RecordChanges
75 \CodelineIndex
76 \EnableCrossrefs
77 \setcounter{IndexColumns}{2}
78 \settowidth\MacroIndent{\ttfamily\scriptsize 000\ }

ここからが本文ページとなります。

79 \begin{document}
80 \title{The p\LaTeXe\ Sources}
81 \author{Ken Nakano \& Japanese \TeX\ Development Community}
82
83 % This command will be used to input the patch file
84 % if that file exists.
85 \newcommand{\includelpatch}{%
86   \def\currentfile{plpatch.ltx}
87   \part{plpatch}
88   {\let\ttfamily\relax
89     \xdef\filekey{\filekey, \thepart={\ttfamily\currentfile}}}%
90   Things we did wrong\ldots
91   \IndexInput{plpatch.ltx}}
92
93 % Get the date from plvers.dtx
94 \makeatletter
95 \def\patchdate{0}%% Modified (May 8, 2016)
96 \begingroup
97   \def\ProvidesFile#1\pfmtversion#2{\date{#2}\endinput}
98   \input{plvers.dtx}
99 \global\let\X@date=\@date
100
101 % Add the patch version if available.
102 \long\def\Xdef#1#2#3\def#4#5{%
103   \xdef\X@date{#2}%
104   \xdef\patchdate{#5}%
105   \endinput}%
106 \InputIfFileExists{plpatch.ltx}
107   {\let\def\Xdef}{\global\let\includelpatch\relax}
108 \endgroup
109
110 \ifx\@date\X@date
111   \def\Xpatch{0}
112   \ifx\patchdate\Xpatch\else
113     \edef\@date{\@date\space Patch level\patchdate}
114   \fi
115 \else
116   \@warning{plpatch.ltx does not match plvers.dtx!}
117   \let\includelpatch\relax
118 \fi
119 \makeatother
120
121 \pagenumbering{roman}

```

```

122 \maketitle
123 \renewcommand\maketitle{}
124 \tableofcontents
125 \clearpage
126 \pagenumbering{arabic}
127
128 \DocInclude{plvers} % pLaTeX version
129
130 \DocInclude{plfonts} % NFSS2 commands
131
132 \DocInclude{plcore} % kernel commands
133
134 \DocInclude{plext} % external commands
135
136 \DocInclude{pl209} % 2.09 compatibility mode commands
137
138 \DocInclude{kinsoku} % kinsoku parameter
139
140 \DocInclude{jclasses} % Standard class
141
142 \DocInclude{jltxdoc} % dtx documents class
143
144 %\includeltpatch % patch file (comment out May 8, 2016)
145

```

ltxdoc.cfg に \AtEndOfClass{\OnlyDescription} が指定されている場合は、ここで終了します。

```

146 \StopEventually{\end{document}}
147

```

変更履歴と索引を組版します。変更履歴ファイルと索引の作り方の詳細については、おまけ C.1 を参照してください。

```

148 \clearpage
149 \pagestyle{headings}
150 % Make TeX shut up.
151 \hbadness=10000
152 \newcount\hbadness
153 \hfuzz=\maxdimen
154 %
155 \PrintChanges
156 \clearpage
157 %
158 \begingroup
159   \def\endash{--}
160   \catcode'\- \active
161   \def-\{\futurelet\temp\indexdash}
162   \def\indexdash{\ifx\temp-\endash\fi}
163
164   \PrintIndex

```

```
165 \endgroup
```

ltxdoc.cfg に 2 度目の \PrintIndex が指定されているかもしれません。そこで、最後に、変更履歴や索引が 2 度組版されないように \PrintChanges および \PrintIndex コマンドを何も実行しないようにします。

```
166 \let\PrintChanges\relax
167 \let\PrintIndex\relax
168 \end{document}
169 \pdoc)
```

## C おまけプログラム

### C.1 シェルスクリプト mkpldoc.sh

p<sub>La</sub>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> のマクロ定義ファイルをまとめて組版するときに便利なシェルスクリプトです。このシェルスクリプト<sup>4</sup>の使用方法は次のとおりです。

```
sh mkpldoc.sh
```

#### C.1.1 mkpldoc.sh の内容

まず、以前に pldoc.tex を処理したときに作成された、目次ファイルや索引ファイルなどを削除します。

```
170 (*shprog)
171 for f in pldoc.toc pldoc.idx pldoc.glo ; do
172 if [ -e $f ]; then rm $f; fi
173 done
```

そして、ltxdoc.cfg を空にします。このファイルは、jltxdoc.cls の定義を変更するものですが、ここでは、変更されたくありません。

```
174 echo "" > ltxdoc.cfg
```

そして、pldoc.tex を処理します。

```
175 platex pldoc.tex
```

索引と変更履歴を作成します。このスクリプトでは、変更履歴や索引を生成するのに mendex プログラムを用いています。mendex は makeindex の上位互換のファイル整形コマンドで、索引語の読みを自動的に付けるなどの機能があります。

-s オプションは、索引ファイルを整形するためのスタイルオプションです。索引用の gind.ist と変更履歴用の gglo.ist は、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のディストリビューションに付属しています。

---

<sup>4</sup>このシェルスクリプトは UNIX 用です。しかし rm コマンドを delete コマンドにするなどすれば、簡単に DOS などのバッチファイルに修正することができます。

-o は、出力するファイル名を指定するオプションです。

-f は、項目に“読み”がなくてもエラーとしないオプションです。makeindex コマンドには、このオプションがありません。

```
176 mendex -s gind.ist -d pldoc.dic -o pldoc.ind pldoc.idx
177 mendex -f -s gglo.ist -o pldoc.gls pldoc.glo
```

ltxdoc.cfg の内容を\includeonly{}にし、pldoc.tex を処理します。このコマンドは、引数に指定されたファイルだけを“\include”するためのコマンドですが、ここでは何も\include したくないので、引数には何も指定をしません。しかし、\input で指定されているファイルは読み込まれます。したがって、目次や索引や変更履歴のファイルが処理されます。この処理は、主に、これらでエラーが出るかどうかの確認です。

```
178 echo "\includeonly{}" > ltxdoc.cfg
179 platex pldoc.tex
```

最後に、再び ltxdoc.cfg を空にして、pldoc.tex を処理をします。本文を 1 ページから開始していますので、この後、もう一度処理をする必要はありません。

```
180 echo "" > ltxdoc.cfg
181 platex pldoc.tex
182 # EOT
183 </shprog>
```

## C.2 perl スクリプト dstcheck.pl

DOCSTRIP 文書ファイルは、L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X のソースとその文書を同時に管理する方法として、とてもすぐれていると思います。しかし、たとえば jclasses.dtx のように、条件が多くなると、入れ子構造がわからなくなってしまうがちです。L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X で処理すれば、エラーによってわかりますが、文書ファイルが大きくなると面倒です。

ここでは、DOCSTRIP 文書ファイルの入れ子構造を調べるのに便利な、perl スクリプトについて説明をしています。

この perl スクリプトの使用方法是次のとおりです。

```
perl dstcheck.pl file-name
```

### C.2.1 dstcheck.pl の内容

最初に、この perl スクリプトが何をするのかを簡単に記述したコメントを付けます。

```
184 < *plprog>
185 ##
186 ## DOCSTRIP 文書内の環境や条件の入れ子を調べる perl スクリプト
187 ##
```

このスクリプトは、入れ子の対応を調べるために、次のスタックを用います。〈条件〉あるいは〈環境〉を開始するコードが現れたときに、それらはスタックにプッシュされ、終了するコードでポップされます。したがって、現在の〈条件〉あるいは〈環境〉と、スタックから取り出した〈条件〉あるいは〈環境〉と一致すれば、対応が取れているといえます。そうでなければエラーです。

@dst スタックには、〈条件〉が入ります。条件の開始は、“%<\*(条件)>”です。条件の終了は、“%</(条件)>”です。〈条件〉には、>文字が含まれません。@env スタックには、〈環境〉が入ります。

先頭を明示的に示すために、ダミーの値を初期値として用います。スタックは、〈条件〉あるいは〈環境〉の名前と、その行番号をペアにして操作をします。

```
188 push(@dst,"DUMMY"); push(@dst,"000");
189 push(@env,"DUMMY"); push(@env,"000");
```

このwhile ループの中のスクリプトは、文書ファイルの1行ごとに実行をします。

```
190 while (<>) {
```

入力行が条件を開始する行なのかを調べます。条件の開始行ならば、@dst スタックに〈条件〉と行番号をプッシュします。

```
191 if (/^%<*(\[^\>]+\>)/) { # check conditions
192     push(@dst,$1);
193     push(@dst,$.);
```

そうでなければ、条件の終了行なのかを調べます。現在行が条件の終了を示している場合は、@dst スタックをポップします。

```
194 } elsif (/^%<\/([^\>]+\>)/) {
195     $linenum = pop(@dst);
196     $conditions = pop(@dst);
```

現在行の〈条件〉と、スタックから取り出した〈条件〉が一致しない場合、その旨のメッセージを出力します。

なお、DUMMY と一致した場合は、一番外側のループが合っていないということを示しています。このとき、これらのダミー値をスタックに戻します。いつでもスタックの先頭をダミー値にするためです。

```
197     if ($1 ne $conditions) {
198         if ($conditions eq "DUMMY") {
199             print "ARGV: '</$1>' (1.$.) is not started.\n";
200             push(@dst,"DUMMY");
201             push(@dst,"000");
202         } else {
203             print "ARGV: '<*$conditions>' (1.$linenum) is ended ";
204             print "by '<*$1>' (1.$.)\n";
205         }
206     }
207 }
```

環境の入れ子も条件と同じように調べます。

verbatim 環境のときに、その内側をスキップしていることに注意をしてください。

```
208 if (/^% *\\begin\\{verbatim\\}/) { # check environments
209     while(<>) {
210         last if (/^% *\\end\\{verbatim\\}/);
211     }
212 } elsif (/^% *\\begin\\{([^{}]*)\\}\\{(.*)\\}/) {
213     push(@env,$1);
214     push(@env,$.);
215 } elsif (/^% *\\begin\\{([^{}]*)\\}/) {
216     push(@env,$1);
217     push(@env,$.);
218 } elsif (/^% *\\end\\{([^{}]*)\\}/) {
219     $linenum = pop(@env);
220     $environment = pop(@env);
221     if ($1 ne $environment) {
222         if ($environment eq "DUMMY") {
223             print "$ARGV: '\\end{$1}' (l.$.) is not started.\n";
224             push(@env,"DUMMY");
225             push(@env,"000");
226         } else {
227             print "$ARGV: \\begin{$environment} (l.$linenum) is ended ";
228             print "by \\end{$1} (l.$.)\n";
229         }
230     }
231 }
```

ここまでが、最初のwhile ループです。

```
232 }
```

文書ファイルを読み込んだ後、終了していない条件があるかどうかを確認します。すべての条件の対応がとれていれば、この時点での@dst スタックにはダミー値しか入っていません。したがって、対応が取れている場合は、最初の2つのポップによって、ダミー値が設定されます。ダミー値でなければ、ダミー値になるまで、取り出した値を出力します。

```
233 $linenum = pop(@dst);
234 $conditions = pop(@dst);
235 while ($conditions ne "DUMMY") {
236     print "$ARGV: '<*$conditions>' (l.$linenum) is not ended.\n";
237     $linenum = pop(@dst);
238     $conditions = pop(@dst);
239 }
```

環境の入れ子についても、条件の入れ子と同様に確認をします。

```
240 $linenum = pop(@env);
241 $environment = pop(@env);
242 while ($environment ne "DUMMY") {
243     print "$ARGV: '\\begin{$environment}' (l.$linenum) is not ended.\n";
```

```

244     $linenum = pop(@env);
245     $environment = pop(@env);
246 }
247 exit;
248 </plprog>

```

### C.3 DOCSTRIP バッチファイル

ここでは、付録 C.1 と付録 C.2 で説明をした二つのスクリプトを、このファイルから取り出すための DOCSTRIP バッチファイルについて説明をしています。

まず、DOCSTRIP パッケージをロードします。また、実行経過のメッセージを出力しないようにしています。

```

249 <*Xins>
250 \input docstrip
251 \keepsilent

```

DOCSTRIP プログラムは、連続する二つのパーセント記号 (%%) ではじまる行をメタコメントとみなし、条件によらず出力をします。しかし、“%” は  $\text{\TeX}$  ではコメントであっても、sh や perl にとってはコメントではありません。そこで、メタコメントとして出力する文字を “##” と変更します。

```

252 {\catcode'#=12 \gdef\MetaPrefix{## }}

```

そして、プリアンブルに出力されるメッセージを宣言します。ここでは、とくに何も指定していませんが、宣言をしないとデフォルトの記述が ‘%%’ 付きで出力されてしまうため、それを抑制する目的で使用しています。

```

253 \declarepreamble\thispre
254 \endpreamble
255 \usepreamble\thispre

```

ポストアンブルも同様に、宣言をしないと ‘\endinput’ が出力されます。

```

256 \declarepostamble\thispost
257 \endpostamble
258 \usepostamble\thispost

```

`\generate` コマンドで、どのファイルに、どのファイルのどの部分を出力するのかを指定します。

```

259 \generate{
260   \file{dstcheck.pl}{\from{platex.dtx}{plprog}}
261   \file{mkpldoc.sh}{\from{platex.dtx}{shprog}}
262 }
263 \endbatchfile
264 </Xins>

```



## 参考文献

- [1] Donald E. Knuth. “*The T<sub>E</sub>Xbook*”. Addison-Wesley, 1984. (邦訳：斎藤信男監修, 鷺谷好輝訳, T<sub>E</sub>X ブック 改訂新版, アスキー出版局, 1989)
- [2] インプレス・ラボ監修, アスキー書籍編集部編『縦組対応 パーソナル日本語 T<sub>E</sub>X』アスキー出版局, 1994
- [3] Michel Goossens, Frank Mittelbach, Alexander Samarin. “*The L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X Companion*”. Addison-Wesley, 1994.
- [4] Laslie Lamport. “*L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X: A Document Preparation System*”. Addison-Wesley, second edition, 1994.
- [5] Laslie Lamport. “*L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X: A Document Preparation System*”. Addison-Wesley, 1986. (邦訳：倉沢良一監修, 大野俊治・小暮博通・藤浦はる美訳, 文書処理システム L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X, アスキー, 1990)
- [6] アスキー出版技術部責任編集『日本語 T<sub>E</sub>X テクニカルブック I』アスキー, 1990.
- [7] 中野 賢『日本語 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X 2<sub>ε</sub> ブック』アスキー, 1996.
- [8] 河野真治著『入門 perl』アスキー出版局, 1994

## 変更履歴

1995/05/08 v1.0	・ p $\text{\LaTeX}$ 2 $\epsilon$ に付属するファイルの説明を更新 . . . . .	5
・ first edition . . . . .		2
1995/08/25 v1.0a	・ platexrelease の説明を追加 . . . . .	7
・ 互換性について、DOCSTRIP の使い方、参考文献を追加 . . . . .		2
1996/02/01 v1.0b	・ ドキュメントを更新 . . . . .	1
・ DOCSTRIP にともなう変更 . . . . .		16
1997/01/23 v1.0c	・ フォーマット作成時に $\text{\LaTeX}$ のバナーを一旦保存 . . . . .	3
・ DOCSTRIP にともなう変更 . . . . .		16
・ Don't copy gind.ist and gglo.ist from $\$$ TEXMF/tex/latex2e/base directory. . . . .		12
1997/01/25 v1.0c	・ ドキュメントから plpatch.ltx を除外 . . . . .	10
・ Add to filecontents environment for pldoc.dic. . . . .		8
1997/01/29 v1.0c	・ 一時コマンド \orgdump を最終的に未定義へ . . . . .	3
・ Rename pltpatch to plpatch. . . . .		10
2016/01/27 v1.0d	・ pfttrace の説明を追加 . . . . .	5
・ mkpldoc.sh を改善 . . . . .		12
	2016/05/21 v1.0k	1
	・ 変更履歴も出力するようにした . . . . .	